



松尾貴史の
メイクマネー
ルーズマネー
ake Money
ose Money

Vol.69

構成・文／八村晃代
撮影／菊地英二

外交ジャーナリスト・作家

手嶋 龍

Ryurichi Teshima

「外交とは、武器を持たない
言葉の戦争」です」

9・11の際、NHKワシントン支局長として現地からの中継放送を担い、
独立後にインテリジェンス小説『ウルトラダラー』、『スキハラダラー』を発表し、ベストセラーに。
そんな『ミスター・インテリジェンス』手嶋氏の、知られざる素顔に迫る!?

「お雇い外国人に 日本のリーダーを やっていただいても、 いいと思うんですよ。 サッカー界みたいに」

手嶋



スパイ・ミュージアムに 本物のスパイがいる!?

松尾 手嶋さんのご著書には、よくスパイが出てきますよね。僕ら子どもの頃の印象だと、スパイって、『007』とか、『スパイ大作戦』のイメージなんですけど、スパイ活動をしている人は現実に相当いるんですか。

手嶋 もちろんいますよ。でも映画に登場するスパイは「インテリジェンス・オフィサー」のごく一部にすぎません。情報の世界で生きている人々を「インテリジェンス・オフィサー」といいますが、彼らは情報を分析したり、エージェントを差配したりと、じつに多様な仕事をしています。インテリジェンス・コミュニティに属しているというだけなら、僕らもその一員かもしれません。でも僕はスパイではありません。もともと、わが物語の主人公は、英国秘密情報部に属する情報士官ですが。

外国政府の懐深く浸透して機密情報を手手するのは、スパイと言っているでしょう。

松尾 手帳の紙が水に溶けたり、あと、小さなカメラで資料を撮ったり（笑）。

手嶋 ああ、そういう実際のグッズをご覧になりたいのなら、ワシントンDCの「スパイ・ミュージアム」に行かれるといい。

冷戦時代に活躍したスパイたちが使った小型カメラとか、口紅型拳銃とか揃っていますよ。

松尾 えー、行ってみたいな。手嶋 その中に通称「スパイレストラン」というのがあります。外なことに味もいけるのです。

「その筋の人」たちとの会食に便利です。「朱の法衣をまといている枢機卿たちのなかでは、朱色のジャケットが目立たない」という諺があります。こんなところに本物が現れることはない、と皆思いますから、会合の意外な穴場なのです。

松尾 まさか、スパイがそういう場所にはいないだろうと思う。その裏をかくわけですね。

手嶋 情報の世界は二重底です。松尾 この間、「ロシアの美人スパイ」が逮捕され、話題になりましたね。

手嶋 例の「美人すぎるスパイ」です。僕の友人に「外務省のラスプーチン」と呼ばれた。

松尾 ああ、佐藤優さん。手嶋 そう、彼はモスクワ大学で、宗教弁証学とかいう難しい講義を教えていたのですが、ロシアでは優秀な学生にかなりの美人がいるのだそうです。ロシア美人の批評家でもある佐藤ラスプーチン氏によれば、「美しすぎるスパイ」たるアンナ・チャップマンは偏差値でいうとわずか48。失礼ながら中の下だそうですね。

松尾 ぜんぜん美人じゃないと。手嶋 まあ、ゴージャスな人ではあります。いま米口間では、核開発にひた走るイランをめぐって熾烈な情報戦が戦われている。

捕まった10人のスパイに、アメリカ側、ロシア側の双方が隠したい人がいるのです。したがって、「美人すぎるスパイ」にメディアの眼を惹きつけて、カモフラージュしたのでしよう。松尾 ミス・デイレクシオン？手嶋 一種の目くらましなので。佐藤ラスプーチン流に言うところ「嘸ませ犬」なのです。松尾 アハハハ。

僕はどっちかというところ 「ギャンブル」が本業です

松尾 手嶋さんはNHKにいらしたんですね。そもそもジャーナリストになろうと思っただけは？

手嶋 （絶句）。奇しくも、同じ質問を今朝、ラジオの生番組でも受けました。「リスナーからの質問」という恐ろしいコーナーがあつて、僕も3秒ほど絶句してしまつて……。放送の世界では、3秒の沈黙は放送事故に近いのです。

松尾 正確には8秒が放送事故ですが、「3秒以上は黙るな」ってふうには言われますね。

手嶋 なら3秒はやはり……。松尾 絶句するほどの深い事情があつたのですか（笑）。

手嶋 正直に言うとお、僕はジャーナリストになつて社会の木鐸として……といった動機で、この仕事を選んだわけではありません。社会に出てお金を稼がな

いやけない理由がなかったのです。僕はギャンブルがかなり強いものだから。

松尾 おいぢよかぶですか？

手嶋 いや、株式投資です。

松尾 すみません、ギャンブルっておっしゃったから（笑）。

手嶋 当時、「アラビヤ石油の大相場」がありまして、僕はこれでひとヤマ当て、かなりのキャッシュを手に入れました。ですから働く必要が全くなかつたのです。不真面目ですみません。

松尾 へー。手嶋 でもいいことばかりじゃありません。残念ながら、当時は「フリーター」という言葉がありませんでしたから……。

松尾 つまり「無職」ってことでもなんね。

手嶋 ええ、当時、鎌倉に住んでいたのですが、隣に「村田のババア」と呼ばれたご老人がいたんですが、僕が終電で帰ると庭掃除をしていて「おやおや、手嶋さま、このように遅く、どうなされたのですか」って尋ねるのですよ。そこで僕は考え込んでしまいました。学生でも、こんなふうなさいのだから、卒業してアラアラしていたら、「おやおや、どうなさつたのですか、お身体も丈夫なのに」と責められるにちがいないと。

松尾 アハハハハ。

手嶋 何とか対策を考えねば。

松尾 村田のババアのために。

手嶋 何か対策を考えねば。



「東京には各国の情報機関が腕利きの情報士官を送り込んでいる。良質なインテリジェンスが東京に集まっているからです」(手嶋)

手嶋

手嶋 そんな折、横須賀線でチエコの亡命詩人が主人公のスパイ小説を読んでいたら、彼がスパイであることをカモフラージュするためBBCに勤めていると書いてある。そこで啓示を受けたのです。BBC⇨英国放送協会、日本にも日本放送協会がある……。

松尾 そんな不純な動機で入社したのに、その後、ワシントン支局長にもなつて。

手嶋 ですから、ワシントンに赴任しても、すぐに辞めて帰国しようと思いましたが。というのも、何の備えもなく、あんな厄介な街に赴任しても歯がたつはずがない。ちょうど無酸素で8000メートル級のヒマラヤの頂上へ登るようなものです。大

統領に取材をしようにも、大統領は最高峰にいたので姿もみえません。早々に退散しようと思つていたのですが、その前にスミソニアン博物館群を見おこなきゃと、毎朝「おはようございませう」と、議会のほうへ行ってきます」と、議会のほうにあるスミソニアンに日参しました。

松尾 アハハ、かなりの不良少年ですね。

手嶋 そんな折に、支局に1本の電話がかかってきたのです。それは運命の分かれ目でした。

松尾 え？

手嶋 初めて聞く声でした。イギリス英語で「ジェフアーン・ホテルに來い」という呼び出しでした。「ワシントンの街はどうだ」と聞くので「まったく

「芸能界だと…、渡哲也さん
なんかいいかも。危機管理能力が
すごくおありだから」
松尾



通用しそうもないので日本に帰ろうと思つている」と正直に答えました。すると「まあ、お若い、そんなに慌てたものでもなからう」と、オックス・ブリッジ訛りで言うのです。

松尾 いかにもイギリス風のやりとりですね(笑)。

手嶋 黙つて小さな紙に2人の名前を書き付けて差し出したのです。「帰国する前に会つてみなさい」と。僕は、あつ、あの時の……と思ひ至りました。

松尾 いやいよスパイ小説を読んでいるような気になつてきた。彼のボスだった駐日大使にちょっとだけ手を貸したのです。イギリス産ウイスキーの関税障壁を低くする対日工作のお手伝いをしたことがあります。親しくしていた政府税調の有力メンバーに頼んで、税調の答申にほんの少しだけ筆を入れてもらいました。形容詞を少しだけ英国寄りにしてもらつただけなのです。

が。読みよによつては、関税の引き下げに道が開かれたと受け取れるものでした……。

松尾 へー、大使は喜んでですよ。

手嶋 「君にはお世話になつた。借りは必ず返す」と。そんなことは忘れていたのですが、プロは義理堅く、約束を忘れないものなのです。ワシントンで苦

勞していると察して、2人のキー・パーソンを紹介してくれたのでしよう。それは情報の金鉱脈でした。僕はその金鉱脈をひたすら芋づる式に辿つていけばよかつた。その人脈は、一瀉千里にホワイトハウスへつながつていました。あの電話がなければ早々にあの街をおさらばしていただでしよう。

松尾 そして、村田のバアの隣に戻つていた。

手嶋 そうでしようね。結局、前後あわせて十数年に亘つてワシントンにいたのですから。

松尾 「苦勞なさつてない」つておっしゃるけど、情報を集めて分析して、世の中に伝えるのは大変なことだと思ひます。

手嶋 正直に言えば、一般的な情報を伝えるのはさして苦勞はいりません。しかし「インテリジェンス」に高められた情報を扱うのはかなりの苦勞です。日本語でいふふうの情報は「インフォーマーシオン」にすぎません。そんな雑多な情報の海から決断に役立つものを選び分け、真偽を確かめ、その意味を読み解いて、「インテリジェンス」に精製しなければ、情報は真の力をもちません。



Ryuichi Teshima
NHKのドイツやワシントン特派員として東西冷戦の終焉に立会い、『たそがれゆく日米同盟』『外交敗戦』を発表。独立後に発表した『ウルトラ・ダラー』『スキハラ・ダラー』はベストセラーに。近著に池上彰氏との対談本『武器なき“環境”戦争』がある。

Takashi Matsuo
タレント。1960年兵庫県神戸市生まれ。大阪芸術大学を卒業後、84年に芸能界デビュー。テレビ、ラジオ、映画や舞台、雑誌のエッセイや単行本執筆、自主制作CDなど、幅広い分野で活躍。近著は『なぜ宇宙人は地球に来ない? 笑う超常現象入門』。

松尾 僕の場合、情報収集→分析→決断だと、分析の前で止まつてしまいます(笑)。ちなみに、手嶋さんはこの先、日本はどうなると予測されますか?

手嶋 今までの日本は非常に恵まれた環境に安住してきました。しかし、これからも、そんな幸せな環境に身を置き続けられる保証はありません。必ずや国家の安全保障を揺るがす事態に突きあたるはず。日米同盟には光と影が付きまといつています。光とは言うまでもなく、戦後の日本が、対米同盟のお陰で、地雷を途上国に輸出することなく世界第二の経済大国になることができたことです。つまり軽武装・経済重視の路線を歩んで、今日の繁栄を手にした。

松尾 そのとおりですね。

手嶋 その一方で失つたものも少なくありません。アメリカという超大国の傘の下にひっそりと身を寄せているうち、独自のインテリジェンス感覚を磨いて、嵐の中へ乗りだしていく能力をすっかり喪つてしまいました。国家の舵取りを安んじて任せられる指導者が払底してしまつた。

松尾 確かに困つたことです。

手嶋 現状は深刻ですが、絶望の唄を歌うのはまだ早いと思ひます。リーダーとしての資質を備えている方といえは、菅原文太さんなんてすごくいいと思う。高倉健さんもいいけるはず。手嶋 芸能界だけを見渡しても、政界よりいい人材がいらつしやると思ひます。あなたの身の安全のためにこれだけは言わないほうがいい」と忠告されているのですが、お雇い外国人に政治を任せてはどうでしょう。

松尾 憲法上ダメだつたら、その期間だけ帰化するって方法もありますよ。

手嶋 サッカーのザツケローニ監督には総額4億円出しているのですよ。日産の社長がカルロス・ゴーンじゃダメだという人はもはやいない。アジアにも欧米にも人材はたくさんいます。

松尾 GDPとか、日本の生産能力とかを数値的に評価するシステムをつくつて、歩合給でやつてもらえばいいかも。

手嶋 ビル・クリントンさんも人間味溢れる指導者ですよ。お辞めになつた1年後くらいに、アメリカの空港で、ひとり紙コップでコーヒを飲んでいらしたので「ミスター・プレジデント、先日、日本にいらしたんですよ」と話しかけたら、日本語で「北の新天地」といい、北の新天地が大好きだと言つていました。北の新天地にさえ連れて行けば、しばらく日本に滞在してくれるかもしれません。

松尾 アハハハ(爆笑)。